

宋代における『止観義例』の読まれ方

大松 博典

一

標題について若干の説明を加える。中国天台宗を歴史時代区分で考察する場合、趙宋天台という呼称が一般的である。

これは劉宋（四二〇—四七九）に対する趙宋（九六〇—一二七九）の呼称に、当時の天台宗という意味合いを込めて使われたし、た用語のようである。が、これは如何なものであろうか。なぜなら、劉宋には天台宗の形はできていないのであり、わざわざ趙宋と区別して、趙宋天台という必要はなく、宋の天台、宋代天台で充分ではないだろうか。また、宋の天台のみを取りあげるのであれば、靖康の変（一一二七）をさかいとする北宋と南宋とを別々に論ずる必要があり、ひとつづまりに趙宋天台とするのはふさわしいとは思えない。この二点から趙宋天台という呼称には検討の余地があるのではないだろうかと考え「宋代」とした。

中国天台宗を中興した荆溪湛然（七一—七八二）には三大

部に関する註釈書を始めとして龐大な数の著作が現存するが、中でも、『止観義例』二巻は、『摩訶止観』に説かれる要点を七章に分類し、天台観門の概要を述べたものといわれる。名称を列記すると第一所伝部別例、第二所依正教例、第三文義消釈例、第四大章総別例、第五心境疑例、第六解行相資例、第七喻疑顯正例の七章である。この『止観義例』が湛然教学の中でも特異な位置をしめることは先学によって指摘されるところである。湛然の教学を確認することによって、自己の正統性を主張するに至った宋代の諸師達も、当然、『止観義例』を研究したのであろう。が、現存する註釈書としては、正統四明天台からは異端者扱いにされ、後山外派に属するとされた神智從義（一〇四三—一〇九一）の『止観義例纂要』六巻と、正統四明三家のうち広智系に属するとされた草堂処元（一〇三〇—一一一九）の『止観義例随釈』六巻がある。『止観義例』の研究には、この両本を並読し参照する必要があることは夙に指摘されるところである。周知のごと

く、四明知礼（九六〇—一〇二八）没後の天台宗は、知礼の立場を支持する四明三家と称される系統が大勢を占めたのは史実であるが、そこに多少の摩擦があったのも否めない事実である。すなわち、北宋代は四明学の位置づけも未だ確かではないのに対し、南宋代はほぼ確定してくる。そこには南屏系のはたした役割が重要であるが、ここでは、四明学の権威づけが未だ確定していない混沌としていた北宋天台の、ひとつの象徴として『纂要』と『随釈』を取りあげ、もつて北宋末の天台宗をはかるとともに、『止観義例』がどのような読まれ方をしたのかを探ってみたい。

二

著述の動機についてみると、『纂要』の序文によれば、従義は『摩訶止観』と『止観義例』との関係をそれぞれ「法華の妙行」と「妙行の輪輓」とおさえる。さらに『義例』が著わされた理由のひとつに、湛然の門人であった清涼澄観が師である湛然に背いて賢首にはしった、そのことを論難するたために著わしたととらえる。『輔行』と『義例』との関係は、『輔行』が『摩訶止観』の細目をひらいたものであるのに対し、『義例』は大科を結したものであるとおさえ、『輔行』『義例』の両書とも僻見を正し、妙行を明らかに示そうとする同じ趣旨のもとに著わされたととらえる。これに対し『随釈』

宋代における『止観義例』の読まれ方（大松）

の序文は、『纂要』の主張を論駁するために著わしたと謳う。すなわち、処元の志の中には、四明が成し得なかった『義例』の解釈を自分が遂げようという念願が以前からあった。そこに、たまたま従義が『纂要』を著わし、その善し悪しを尋ねてきた。それを検討した結果、納得の行かないところがあり『随釈』を著わしたという。両本の間には三十年ほどの隔たりがあり、純粹な意味での対論書ではないが、依つて立つ所がかなり異なっていることは、はっきりしているといえよう。これらの序文を通してみる限り、澄観等を中心とした華嚴学への対処のしかたと四明学をどのように位置づけるか、という二点において、両本の相違が顕著であるように思われる。この二点についてももう少し見てゆくことにしよう。

まず、華嚴学への対処のしかたを『纂要』で見ると、後世の歴史家からは後山外派とされ異端視された従義にしては、華嚴学に対する激しいまでの対決姿勢が読みとられる。それは、禅宗批判部分における圭峰宗密や、喻疑顕正例における清涼澄観への論難に端的に表われている。そこに見られるのは、賢首が修行禅観は天台止観によることを明示しているのに宗密が天台止観をしりぞけた。或いは、荆溪をうけた澄観が天台から賢首に師事した。これらはいずれも祖に背き師に違ふことになるという師資相承論からの論難である。また、『宋高僧伝』等の記事によって荆溪が批判したのは澄観であ

るとの確信を得、漸頓・頓頓の問題をからめて、執拗なまでに澄観の姿勢を名指して批判して行く。一方『随釈』を見ると、華嚴学に対する表だつた批判は『纂要』に比べてはるかに少ない。宗密はもちろんのこと澄観についても、喩疑顕正例に至るまで「僻解の師」として語られ澄観の名前すら出さない。次に四明学の位置づけをみると、『纂要』は従義に与えられた評価から予想されるように、四明を批判している所が多い。これは、従義の教学全般にわたることが既に先人の研究で明らかにされている。その姿勢の根本には、荆溪までの天台学とそれ以後の天台学とはっきり区別する従義の姿勢があつたように思われる。『随釈』は『纂要』のこうした姿勢に徹底した反論を展開する。すなわち、処元は自己の天台学の範囲を四明学にまでひろげ、四明を擁護する立場にまわる。言い換えれば、『義例』を通して、『纂要』に説かれた四明批判をことごとく、しかも注意深く払拭しようとしたのが『随釈』であつたと思われる。

三

従義と処元は、四明三家の中で中核をなし活躍したといわれる広智系の法孫であるが、後世には従義が異端者として攻撃されることになる。そこには、四明学の問題が微妙からんでいると思われるが、今回は特に『纂要』と『随釈』の著

述の動機、及び、相違点に絞って考察を加えてみた。『纂要』も『随釈』も『義例』を『止観』の綱要書ととらえる点については同じである。しかしながら、対華嚴学あるいは四明学への対処の仕方について相違が見られる。すなわち、『纂要』は『義例』が華嚴学に対する目的で著わされたとする見方を前面におし出し、澄観ばかりではなく宗密までも激しく批判する。また、四明学に対しても論鋒の衰えを見せない。これに対し『随釈』は『義例』をあくまでも天台宗内の書物として読み込んでゆく姿勢を貫き、『纂要』が対論書とでもいう性格づけをして『義例』を取りあげていったのとは大いに異なる。換言すれば、『纂要』が『義例』を通して天台宗内外の教学に対決的に迫っていったのに対し、『随釈』は専ら『纂要』に盛られた天台宗内の、特に四明学に関する部分に照明をあて、それらを是正しながら『義例』を読んでいったと思われる。従義・処元が生きた時代は、北宋も終わりに近づいており、天台宗徒としての自負を持つ二人が、同門の出でありながら同じ宗典を違つた形で取りあげるような状況になっていたのである。そこには、宋代の天台宗が乗り越えて行かなければならなかった大きな問題、山家・山外論争の収束という課題を解決する時期が迫っていた。『纂要』と『随釈』はその意味でも興味深い書物である。

（細註省略）

（専修大学北上高校教諭）